

教育

紛争・災害 現場で学ぶ

大学院生、インドネシア・アチエに

「内向き」の学生が増えていると言われる中、大阪大が中心となり、アジアの紛争や災害被災地に身を置き「現場で考える」プログラムを進めている。今秋は、29年にわたる独立紛争と、2004年のインド洋大津波といふ二つの大きな困難を体験したインドネシア・アチエ州の州都バンダアチエを、自らも戦争の記憶を色濃く抱える広島、長崎、沖縄などの地で学ぶ大学院生ら約20人が訪れた。

大阪大、広島大、長崎大、研究者を育てようと昨年度始め名桜大(沖縄県)の大学院が、た「アジア 平和と人間の安全 紛争、災害、貧困などアジア 全保障」プログラム。東南アジアの課題に総合的に取り組む研究シニア各国の提携大と留学生を



大地震で壊れた建物の模型に見入る一行(9月9日、バンダアチエ市内の津波博物館)

大津波の被害 東北と比較

受け入れ合うとともに、短期学習ツアーを実施している。今回は、バンダアチエの国立シニア・クアラフ大学を訪問。「人間の安全保障」を考へるシンポジウムに参加したほか、独立を目指してインドネシア国軍と戦闘を続けてきた「自由アチエ運動」(GAM)の元戦闘員らの社会復帰政策や、紛争や津波で被害を受けた女性への支援プログラムなどの講義を受けた。昨年5月に公式に開館した津波博物館も見学。現地の新聞社を訪ねた人もいた。

過酷な体験背負う

日朝国交正常化問題などを研究する大阪大学大学院の速水直さん(28)は、シンポなどで知り合った学生たちが、紛争や津波の生々しい体験を背負っていることを知る。「困難に直面しながらも『紛争と大津波があったからこそあなたたちと知り合いになれた』



と語ってくれた。様々な人と触れ合えた体験は人生の財産」

広島大学院の渡辺恒一さん(27)は津波博物館で、妹が津波の犠牲になった「語り部」ガヤ・トリアナさん(30)の話に聴き入った。「涙が出そうになった」。市内では、海から5キロ流されてきた船が保存されて記念碑になり、壊れなかったモスクが復興のシンボルになっている。「東日本大震災で残った松の木のようにです」。やはり津波の被害にあった東北へ改めて思いをはせた。

同大学院の渡辺恒一さん(34)は、地元紙「セランビ」本社を訪問した。ヤルメン・ディナミカ編集長(45)は、中立報道を心がけた結果、紛争中は国軍からもGAMからも圧迫を受けたと話した。GAMからは計20日間発行を停止させられ、新聞輸送トラック12台が破壊された。さらに津波で社員の4分の1を失い、自分も2人の息子を亡くした。

アチエ問題を研究してきた



語り部のガヤ・トリアナさんの話に聴き入る学生たち(9月9日、バンダアチエ市内の津波博物館) 大津波で岸から約5キロ内陸へ流された船と、壊れた民家。そのまま保存され公園として整備されている(同日、同市内、いずれも草川誠撮影)

言論弾圧 地元紙に取材

紛争が続くイスラエル・パレスチナ問題を研究する大阪大学院の柴田一生さん(24)は、独立の旗を降ろしたアチエの生き方に興味を持ち参加。現地に残り、半年間ホームステイをしてシニア・クアラ大で学ぶ。「この人は、イスラエルとパレスチナのよう『こちら側とあちら側』という概念ではなく、あちら側を含めた『われわれ』という考え方を。もっとアチエを知りたくなった」

教科書にない現実

紛争研究が専門で、院生らを引率した大阪大学院国際公共政策研究科の松野明久教授(56)は「紛争地での平和構築について、教科書や論文だけではわからない、複雑で多様な現実を知ってほしい。学生たちは何かをつかんだようです」と話した。

(草川誠)